

県中教研 保健部会だより

第 40 号

発行日 令和7年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 松尾あおい
題 字 金山 泰仁 先生

養護教諭の役割とは

指導主事 山越 励子

私は保健安全担当者として「学校等欠席者・感染症情報システム」を活用し、各校の感染状況を毎日確認しています。「インフルエンザが流行しそうだ」「感染症が増加してきた」など、学校の様子を窺い知るとともに、養護教諭の先生方の忙しく対応されている姿を想像しています。

さて、研究大会での提案発表では、「どのようにメディア時間を減らすか」について、互いの生活を生徒同士で真剣に伝え合う姿や「班のみんなは思ったより寝る時刻が早かった。やることを早めに終わらせてすぐ寝るようにしよう」など、仲間の助言をもとに、具体的な改善策を考える様子がみられました。主体的に健康な生活を実践してほしいと生徒に願う先生方の熱意が、生徒の心を動かし、必要感をもって取り組む姿につながっていると感じました。

保健体育科（保健分野）では、健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養うことが求められています。生徒が、生活の中にある健康・安全についての課題を発見し、健康情報や知識を吟味し、多様な解決方法を考えるとともに、適切な方法を選択・決定し、自他の生活に活用する学習過程を仕組むことが大切です。この後押しを専門的な立場から行うのが、養護教諭の大きな役割であると考えます。

養護教諭の役割は、日々の健康観察や保健室に来る生徒への対応だけでなく、他の教職員や生徒会保健委員会、保護者、地域との連携、学校保健委員会の開催等、多岐に渡ります。養護教諭の存在を生徒だけでなく、他の教職員も保護者も地域も心強く思い、頼りにしています。どうぞ一人で抱え込まず、学校全体で連携して日々の課題に取り組んでいただけたらと思います。

（西部教育事務所）

目指す資質・能力とは

部長 松尾あおい

令和6年元日に能登半島地震が発生しました。私の勤務校には、家が断水し、長期間避難生活を続けたり、住み慣れた家屋が被害を受けたりするなど、心のケアを必要とする生徒が現在もいます。このような生徒も含め、子供たちが心身ともに健康で安全な生活を営み続けるには養護教諭として何ができるのであろうかと考えさせられた一年でした。

保健部会では、「生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む資質・能力を育てる健康教育はどのようにすればよいか。」を主題とし、研究を進めてきました。「研究の構想」等の見直しを行う中で改めて健康、安全等に関わる育成すべき資質・能力について確認しました。文部科学省の教育課程部会総則・評価特別部会によると、「心身の健康の保持増進に関する指導に関わる育成すべき資質・能力」として、①健康な生活を送るための基礎となる各教科等の知識・技能、②自らの健康を適切に管理し、改善していく力、③健康の大切さ、健康の保持増進に向かう情意や態度等と示されています。また、そうした資質・能力を、「アクティブ・ラーニングの視点からの健康に関する課題解決的な学習プロセスの実現」「教科横断的なカリキュラム・マネジメントの実現」の中で育むこととされています。私たちは、ここで示されている資質・能力を育成するための保健教育を実践していかなければならないと再認識しました。

今年度は、各郡市部会から主題の解明に迫る様々な実践の報告がありました。次年度も、生徒が積極的に心身の健康の保持増進を図っていく資質や能力を身に付け、生涯を通じて健康で活力ある生活を送るための基礎を培う実践研究になるよう、進めていきたいと思います。

（氷・北部中）

第68回 研究大会報告

研究主題を「生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む資質・能力を育てる健康教育はどのようにすればよいか」とし、滑川市・中新川郡保健部会が提案発表した。



○発表内容と部会協議

発表地区5校では、各種調査から見てきた、メディアの長時間利用の課題について「生徒自身のメディアコントロールへの意識を高めること」、「家庭や地域との連携を生かした地域学校保健委員会」について前年度から研究を行ってきた。

継続して行っている生活チェックやメディアコントロール週間等の活動は、生徒同士や担任・養護教諭・保護者がそれぞれ関わり合い、特に生徒同士は、話し合いや振り返りの場を工夫することで、生活習慣を改善しようとする意識を高めることができた。さらに養護教諭が専門性を生かして、チーム・ティーチングによる保健指導や保健室での個別の支援を行うことで、生徒自身が課題に気づき、適切な意思決定や行動選択をしようとする意識につなげることができた。

また、中学校だけでなく、幼・保・小・厚生センター等、多職種連携による地域学校保健委員会を実施することで、校種の枠を超えた系統的・発展的な健康教育ができた。それにより、生徒自らが、生涯にわたって主体的に健康づくりを実践できる資質・能力を育てることに繋がった。

提案発表後の部会協議では、「家族とグループそれぞれで考える目標のねらいと成果」や「担任が継続指導を行うための養護教諭の働きかけ」、「地域学校保健委員会で築いた多職種連携」等についての質問があった。

○指導講話

西部教育事務所の山越励子指導主事から、以下の助言があった。

- ・養護教諭が働きかけ、生徒会保健委員会や家庭、学級が連携して取り組むことで、生徒の課題意識が高まり、生徒が主体となる実践を進めることができた。
- ・養護教諭や専門家の話を聞く場の設定や資料提示の工夫等により、生徒は、科学的根拠に基づく情報を得ることで、知識を再確認し、自己調整しながら実践することができた。
- ・地域ぐるみで共通の課題をもち、多様な立場の人と情報を共有することで、自己選択の幅が広がり、より自分に合った方法が分かると同時に、系統的な生活改善につながっていた。
- ・今後もR-PDCAサイクルで取り組むことを継続し、改善できた生徒を認め広めることで、より実践意欲が高まると思われる。
- ・生徒が適切な意思決定や行動選択を行い、適切に実践していくためには、もっと知りたい、考えたいと思う課題発見、課題解決、保健指導等、学校全体での取組の継続が必要である。
- ・具体的な問題場面を提示し、学習したことを生かした振り返りを行うことにより、生徒が課題を自分事として捉え、適切な解決方法を考えることができるのではないか。

○アドバイザー事業講話

静岡大学教育学部の鎌塚優子教授から「養護教諭の専門性・現代的課題」と題して、多職種連携やダイバーシティの視点から、VUCAの時代に求められる養護教諭の力についてご講演をいただいた。保健室は閉鎖された空間であるため、養護教諭の仕事は周囲には見えにくく、気付かれにくい。しかし、日々の小さな働きかけが子供に生きる力を養っていると話された。

私たちは、養護教諭の専門性と多職種連携を大切にしながら、今後も研究を進めていきたい。

大森智映子（富・東部中）